# 周辺からの記憶 15

~2014年度:宮城・岩手、民話との出会い~

村本邦子(立命館大学)

2017年5月19・20日と熊本へ行った。19日の方は、県の婦人相談員研修で、宇城市 役所が会場だった。宇城市の駅で降り、タクシーで会場へ向かう途中、青いビニールシートをかけたままの家が目立つ。運転手さんに聞くと、この辺りは古い家が多く、被害は大きかった。この状態で住んでおられる方もあれば、住んでおられない方もあるだろう。オリンピックや何やで、資材もなければ人手もなく、なかなか修復工事は進まないという。まだまだ大変だ。

研修は、昨年度に引き続き、震災後の振り返りをして、緊急時対応マニュアル作成に結びつけるというもの。経験を繰り返し振り返り、互いに学びあうという形式で十年来続けてきた研修の延長線上にあると思っている。昨年の7月、震災後三ヶ月に同様の研修をやった時は、まだまだその影響が生々しかったが、1年経った今回は、少し時間が流れ、被災状況によってはまだ大変そうな方もあるものの、全般的には振り返るということができるようになっていた。

多くの相談員さんが、一定期間してから体調不良を経験していた。余震は止まず、つい最近も比較的大きな地震があったが、何度も何度も揺れるので、家のたんすが少しずつ壊れていくということを言われる方があった。「揺れるたびに壊れていくたんすを見て、まるで自分自身を見ているようだった。結局、思い切って捨ててしまい、新しいたんすを買って、すっきりした」とおっしゃられた。

震災が自分自身にどのような影響を及ぼしてきたかと同時に、相談者にどんな影響を 及ぼしてきたか、次の災害で活かせる工夫について語り合ったが、女性のための相談員だ からこそ見えること、言えることがたくさん出てきた。大きな課題は性暴力の問題であ る。阪神淡路大震災の時も東日本大震災の時も問題になったので、熊本でも当初から声を 掛け合って注意して見てきたが、なかなか実態は明らかにならなかった。それが一年を経 て、徐々に明かされてきた事実があった。もう少し深めて、マニュアルに反映させていけ たらと思う。

# 2014年8月

# 「みやぎ民話の会」との出会い

2014年4月、鵜野祐介さんが応用人間科学研究科に赴任してきた。実は、大学時代の同級生で、驚きの再開だったが、彼も大震災以後、細々と東北に通ってきたという。それでは是非一緒にプロジェクトをやりましょうということで、メンバーに加わってもらった。彼は教育人類学や伝承児童文学のあたりが専門で、分野は違うが、私も学生時代は妖精や子守歌、児童文学の研究をやっていたので接点があった。

8月末に宮城県伊具郡丸森町で「第8回 みやぎ民話の学校~土地に息づく語りの声 を3.11後のあなたへ」があるよと誘っても らい、院生たちと一緒に2泊3日の合宿に 参加した。百人を超す参加者で、小さな部屋 に分かれて、丸森に語り継がれる物語や福 島での被災体験に耳を傾け、夜は寝物語を 聴きながら幸せな気分で眠りについた。

「ああ、ここに東北の力がある」と思った。民話をやってきた人たちの物語りはパワフルだ。一般的に、恐怖体験は断片的な記憶のまま物語を成さず、他者と共有されないので孤立感が深まる。民話をやっている人たちは、物語る力が鍛えられているからだろうか、大変な体験を語っているのに、ぐいぐいと引き込む力があり、時にユーモラスでもある。家ごと津波に流され、街中を移動して、ベランダで一夜を明かしたという80歳になる庄司アイさんは、死に直面して、語り継がれてきた先輩たちの物語を思い出し、生き残って、「民話が命綱」と活動を続けている。たとえすべてを失ったとしても、

身ひとつあれば、物語は残る。民話は祖先から手渡される遺産であり、それを語り継ぐことは、時間を超えた大きな流れのなかに自分を含み込んでいくプロセスとも言えるのだろう。









9月10日の震災プロジェクト第4回研究会には、「みやぎ民話の会」のリーダーである小野和子さんをお招きし、「『語る』『聞く』という営みについて~東日本大震災の波をくぐって」と題する講演をお願いした。「みやぎ民話の会」は1975年に結成され、採訪の成果を500冊近い出版物に残すと同時に、直接「声」で民話を聴く醍醐味をと合宿形式の「みやぎ民話の学校」を開催してきた。

東日本大震災の5ヵ月後、2011年8月に

は、宮城県南三陸町のホテル観洋で「第7回 みやぎ民話の学校」を開催したが、全国から 200名が参加して、6名の被災者が自らの被 災体験を語ったという。その語り口は本当 に面白く、自分が伝承してきたものを語ろ うとする人は、聞く人の様子を見ながら、 「自分の語る話がどういうふうに皆の心に 入るだろう、あまりびっくりさせちゃいけ ないぞ、でもここだけは言いたい」と考えな がら語っていたような気がすると小野さん

お連れ合いを亡くした鈴木善雄さん(大正 15 年生まれ)は、まるで、朝「行ってらっしゃい」という時のように、水の中で手を振りながら、静かな顔で海の向こうに流れていってしまったと語られた。それが非常

はおっしゃっていた。

に淡々としていて、誰もが忘れられないシーンになったという。語るとはこういうことか、自分の感情を丸ごと投げつけるのでなく、いったん自分の心に呑み込んで、聞いてくれる人の前に披露して再構成していく。民話の語りによって、そういう力を養っていたのではないか。鈴木さんは、「あそこへ行って話すの、気が重かったんだよ。でも話して良かった。皆がおまえの悲しみを半分こっちへよこせというような顔で聞いてくれていた。それで、行って話してオレも元気が出た」とおっしゃったそうだ。

震災を契機に、それまでなかなか顧みられなかった民話の力が見直され、拡がっているという。「震災による大きな地割れが起きて、たくさんの人が海の向こうに行かれた時に、その命の再生のようにして、新しい光がさし始めたのです。これを生かすべく頑張るのが、私どもの復興ではないかと思っています。復興の一番根っこに横たわるものは、復興に携わる人がそれまでの日常の中で何を形成してきたかということと深くかかわってくるのだと思います」と小野さんは締めくくられた。

# 2014年10月

### メディアテーク「声の図書館」

多賀城でのプロジェクトに先立って、宮 古に足を延ばし、来月のプロジェクトを共 催してくれることになった社会福祉法人若 竹会にご挨拶と打ち合わせに行った後、仙 台に戻り、1年目、宮城でのプロジェクト開 催地を探して訪れたメディアテークを訪れ る。メディアテーク2Fの図書館メディア ライブラリーには、「声の図書館」があって、 「みやぎ民話の会」の語りを聴くことがで きる。2本ほど聴いてみる。夏の民話の学校 でも流していたものだが、静かで美しい語 りの場面が収録されている。





7階の「3月11日をわすれないセンター」では、ちょうど「始まりの朝ごはん」という企画をやっていた。震災後に食べたごはんの写真を展示し、何か思ったことのある人が付箋にコメント書いて貼り付けていくというもの。写真から体験や思いを共有するなかなかおもしろい企画だ。

合わせて、2011年にお世話になった甲斐 賢治さん(せんだいメディアテーク企画・活 動支援室室長)に話を伺った。甲斐さんは、 メディアテークが十周年を迎える 2010 年に、縁あって大阪からやって来た。デジタルデータをアーカイブするという計画を立てていたところで震災が起きたが、方向性は決まってたので5月にオープンさせ、2013年までかけて、データベースを作り直し、著作権の整理などしてきたという。

預かったデータにはジャケットがつけられ、DVDとしてライブラリーに保管される。空襲で焼けてしまった大正・昭和の町並みなどの写真をアーカイブして、ライブラリーに並べたり、イベントをやったりもしている。その一環として、みやぎ民話の会の記録もアーカイブしていった。2011年に南三陸であった「みやぎ民話の学校」で出会って、主要メンバーが自宅に持っていた千本以上の民話を録音したカセットテープを整理するところから始め、2012年から 2013年にかけてデジタルデータにしていった。三部作『なみのおと』『なみのこえ』『うたうひと』もここから生まれている。

ここでは、市民活動よりももう少し堅牢な形で、保管することができる。最初の頃は、「作品でなく記録を」と考えていたが、少しずつ作品であることの意味を考えるようになった。たとえば、映画という形式の作品になると、経済の中に配給システムがあって、そこに入る方が伝承はスムーズになる。頭に浮かんだのは、ゴヤの「マドリード」という絵。スペインの農民が攻めてきたフランス軍に銃を向けられて手を挙げている。アートは記録してきたのだと思った。現代アートでは歴史を扱うということが目減りしてきている。伝承という意味でも、作品という形式が重要なんだと考え方が変わった。

この施設自体を含め、首都圏と宮城、被災

地の外と被災地を行き来するための回路に なるようなイメージで考えてきた。「回路を つなぐ」。スタッフ間では、自分たちのため にあえてそんな風に言語化していた。

甲斐さんの話を聞きながら、震災があったから特別なことをするのでなく、通常業務のなかに震災を含み込んでいくということが重要なのだと思った。災害も日常の一部なのだ。私たちのプロジェクトも、教育の一環という位置づけで定着しつつある。また、「回路をつなぐ」という言葉は、私たちのプロジェクトについても言えるかもしれない。定期的に同じところを訪ねるという関係のある中で、東日本の各地と京都の立命館大学に出会いの回路を作る。民話との出会いもまた、その回路がもたらしてくれたものだ。

#### 「みやぎ民話の会」例会に参加する

プロジェクトの前日、10月4日には、仙台市黒松市民センターで行われた「みやぎ民話の会」の例会に1日参加させて頂いた。 午前中は初めての試みである12月のお話発表会の打ち合わせと練習だった。

加藤恵子さんは、「へびとみみず」を語った後に、いくつかの問題提起をされた。作品を変えて良いのか。「めくらめっぽう」や「ざどうばし」「めっこ」など差別語をどうするのか。一生懸命、丁寧に語れば何を語ってもよいのではないか、解説をつけて使う、やはりダメだと思うなど、いろんな意見が飛びかう。

観音様の安置の話をしたい、丸森の「おじいさんとキツネ」の話をする、「ぶっかけお

わんこと五郎」、名取の「訪印さんとなとりのなんばんねずみっこ」、福岡の「ひこ山とごんざ虫」、「こめつき三太郎」、「つばくらからもらったたね」など、なぜそれを語りたいかという思いとともに次々に内容が決まっていく。

合わせて、「双葉の話や原発の話を聴きた い」、「8か所移動した自分の体験を語って 欲しい」などメンバーへの期待も語られた。 「月1回、役所を通して双葉に関する新聞 のコピーが送られてくるが、それ以上のこ とはわからない。自分の言葉は不足してい る。新聞に出ていた子どもたちの作文など 紹介しようかと思う」という方もあった。ま た、「東電は津波でダメになったところは保 証しない。自分も意見を求められたので、自 分の体験を話す自分の声には力があること を感じた」、その人がいつ何をどのように語 るか決断がいること、周囲が強いることは できないこと、でも背中を押してもらうこ とで可能になることもあることなどたくさ んのやり取りがあり、8月同じようなこと を話すことになる。なんと質の高い議論が 行われていることか。

お昼はみなさんが持ち寄った食べ物を分け合って食べる。栗ごはんやきゅうり、枝豆、かぼちゃ、柿など、土地の季節のもの。



午後は小野和子さんも加わり、『民話の再発見』(吉沢和夫、1974年)の読書会。メンバーから報告があって、昔話と民話の区別が語られる。3段階あって、最初の段階は神話。次がもう信じていないが、そのままに記録。三段階目が昔話で、人々は最初から信じていないのだそうだ。民話は民間信仰、世間話。大学の教室よりも熱気にあふれた知的水準の高い勉強会なのではないかと恐れ入った。さすがというしかない。

# 「おおぞら保育園」の物語

夕方、9月29日からいよいよ新しい園舎に移られた「おおぞら保育園」を訪れ、先生方に話を聞かせて頂く機会を持った。詳細は『臨地の対人援助学』に譲るが、震災からここまでのプロセスについて聞きながら、限られた条件のなか、先生方の子どもたちへの思い、知恵と工夫によって子どもたちを保護する空間を創出してきた歩みそのものが、子どもたちやその家族、地域に与えたであろう力の大きさを思わずにはいられなかった。

新しい園舎は大きく明るくて、子どもたちも年齢集団に分かれてのびのびと過ごせるようになったとのこと。ワクワク楽し気なトレーラーハウスの旧園舎も集まりの場として維持するとのこと、これも伝承されていくべき物語だと思った。









# 多賀城でのプロジェクト

多賀城で三回目となるプロジェクトは、 多賀城図書館、多賀城民話の会との共催で、 10月いっぱいの家族漫画展、10月5日、団 士郎さんの漫画トークと宮城民話の会によ る「ふるさとの民話をみんなで味わおう!」、 支援者交流会を実施した。「多賀城民話の会」 は、午前中、東北歴史博物館今野家住宅で 「民話を聞く会」をやった後、総勢十数名で 駆けつけ、語り手を一話ずつ交代しながら 「桃太郎」「納豆の由来」「七ヶ浜の民話」 「宝てぬぐい」などたくさんの昔話や伝説 を語ってくださった。

後半のやり取りの中で語られた「こさじ伝説」は、多賀城市にある「猩々ヶ池」にまつわる話である。様々なバリエーションがあるが、基本的には、酒屋に酒を飲みにやって来た猩々を殺す計画をこさじという娘が知り、それを猩々に伝えると、猩々は自分が殺されると津波が起こるので、「末の松山」に逃げるように言う。猩々が殺されると本当に津波が起こり、こさじは「末の松山」に逃れて助かるという話だ。

多賀城民話の会の方が、民話では津波が 地震とともに語られていないので、今後子 どもたちに語る時には、地震についても一 緒に語っていきたいとおっしゃった。土地 に伝わる民話は、こんなふうに時代時代の 思いを受けて変化しながら次世代へと語り 継がれていくのだろう。地元のおばあさん たちが、プロのアナウンサーのようにでは なく、それぞれ個性的に語ってくださる雰 囲気が暖かく、今後、若い子育て世代と民話 の会を繋ぐ架け橋になれると良いなと思っ た。











来年は図書館運営上の変化と引っ越しがあるので時期は未定のままだが、図書館のみなさんからは、「息長く一緒にやっていきましょう」と言って頂き、今後の新しい展開を楽しみにしたい。





▲支援者交流会







▲末の松山

# 2014年11月

#### 遠野物語 福二さんのこと

今年は出版企画もあり、宮古でのプロジェクトに入る前に、私だけ一足先に岩手に入り、これまでにプロジェクトをやったことのある遠野や大船渡を訪ねて回った。10月29日(水)には、遠野市子育て支援センターで、お世話になってきた立花正行さんや職員の方々から2011年以降の遠野の状況について聞かせて頂いた。仮設はまだあるが、全般的に言えば、遠野は日常に戻っている感じだった。

それから、遠野文化研究センターの前川 さおりさんに会った。詳細は『臨地の対人援 助学』に掲載したが、2011年、遠野でのプ ロジェクトでお世話になった前川さんが、

「岩手は自殺率の高い県だが、自殺する 人々が最後に来るのが図書館、図書館にど んなメッセージがあれば、思い留まっても らうことができるのだろうかと考える。図 書館・博物館は、あの世とこの世の境目、共 同体から離れて1人で体を休ませられる場 所なのではないか」と話されたことが強烈 な印象として残っていた。



文化財レスキューや献本活動、祭りの話 も面白かったが、遠野物語第99夜に登場す る福二の子孫の話も不思議な後味を残すも のだった。遠野物語第99話は明治29年三 陸大津波にまつわる話だ。月夜の晩、福二と いう男が、田の浜(山田町)で、津波で亡く なった妻が、昔、恋仲にあった男と歩いてい るのを見かける。二人はあの世で夫婦にな っていると聞いて、「おまえ、子どもが可愛 くないのか」と声をかけると、妻は悲しそう な顔をして、泣きながら去って行ったとい う話である。2011年11月、プロジェクト の前日がちょうど文化の日で、ホテルに隣 接する市民ホールでやっていた「遠野文化 フォーラム」を覗いてみたところ、『遠野物 語』誕生百年を迎える企画で、林隆三がこの 話を朗読した。

この福二の子孫にあたる男性の話は、私 も、その後、たまたまNHKで取り上げられ たのを見たが、前川さんによれば、2012年 1月、遠野博物館を訪ねて来たそうだ。福二 は心の病らしきものを抱えていたようで、 妻の幻を見たのも今でいう PTSD だったの かもしれない。親戚は福二のことを語りた がらず、唯一その方の母が義母から聞いて、 「遠野物語を読んでおきなさい」と教えた のだという。当時は、「なぜ、自分のところ の恥だけが晒されなければならないのか」 と腹立たしく、無視していたが、今回の震災 でも田之浜にあった自宅が流され、その母 親も津波で行方知れずのままだった。パソ コンも流されて、家系図やら何やらもなく なってしまったので、この機会にきちんと 向き合おうと思ったそうだ。

実は、福二は遠野物語の佐々木喜善の親 戚にあたり、たまたま遠野図書館に佐々木 喜善の曾孫にあたる男性がいたので、前川さんがつないで、家系図の聞き取りなどその後、何度か行き来があった。その人は釜石に勤めていたが、これをきっかけにふるさとの復興の仕事をしたいと、山田の町役場に移られたそうだ。前川さんは、震災を経験して、遠野という場所は、死者への思い出を長く抱え続けていけるところ、長いスパンで記憶を保管しておくような役割を担っているらしいと考えるようになったという。



#### 遠野の古民家で民話を聴く

夜は、夏の民話の学校で知り合った日本 民話の会の大平悦子さんのご自宅、遠野市 青笹にある藁ぶき屋根の古民家に泊めて頂 く。









囲炉裏を囲んで大平さんが民話を語ってくださったが、ひとつはこの遠野物語 99 話だった。藁ぶき屋根の古民家で、遠野弁の遠野物語を聴く贅沢に胸が震えた。 大平さん宅の魂入れをした神主さんは福二の兄の曾孫にあたり、その妻と交流があるのだそうだ。大平さんは、最初の頃、妻が波にのまれてしまい、忘れがたい恋しい妻にやっと会えたと思ったら、他の男性といたという福二の切ない情けない気持ちを思いながら語っていたそうだが、何度も何度も語るうちに、福二は、この幻を見る必要があるんだと

思うようになったという。

被災された方の話を多く聴くなかに、大 切な身内がいまだ行方不明だが、どうして もあきらめきれず、死亡届を出せずにいた ところ、夢の中に出てきて、ようやく気持ち に区切りが付いたという人がいた。もうひ とつ、やはり身内が行方不明で、イタッコ (祈祷師) に口寄せをしてもらったら、「俺 は今、海の底にいる。穏やかな気持ちでいる から探さなくていいよ」と言った。それを聞 いて、やっと気持ちに区切りがついたとい う。そういう話をいくつか聞いているうち に、福二も同じだったのではないかと思う ようになった。忘れがたい、愛おしい妻では あるけれども、でもどこかで気持ちに区切 りをつけて、自分も前に進まなければいけ ない。そんな思いがその幻を見せたのでは ないか。「もしかして、もしかしたら、奥さ んの方が、あなたがんばってという気持ち で幻を見せてくれたんじゃないか」と、そん な風にも考えるようになったのだそうだ。

佐々木喜善は『奥州の座敷わらし』という本を書いていて、そのなかに、福二が実家に帰って、仏壇のある部屋に寝ていたところ、座敷の戸がちょこっと開いて、手が出てきておいでおいでしているのを見たのだそうで、座敷童子ではなかったか。津波があったのはそれからまもなくしてからだったので、座敷童子が福二に知らせたのではないかというような話も載っている。それを発見した時、大平さんは、「本当に脳天から突き抜けるような思いをした」そうだ。





それからもうひとつ、「娘としゃれこうべ」という話を語ってくださった。長者の娘が3年前、花摘みに出かけたまま行方知れずになっていた。たまたま隣村のおじいさんが、野原を通りかかり、娘のしゃれこうべと一緒に酒盛りをしたことから、ようやく長者が娘の遺骨を見つけることができたという話で、震災後、去年あたりから意識して語るようになったという。被災された方には、「うちは良かったんですよ、見つかっただけでも」という方がたくさんいて、3年半経った9月でも2,601名が行方不明で、今なお折々に探されている。南三陸の語りの会で、ずっと見つからなかった友達の夫がち

ょっと前に見つかって、変だけど「良かった

ね」と言ったという話を聞き、「遺骨というのは、身内にとってみればその人そのものだと思えるようになったとき、この話がしみじみといい話だなと思うようになって聞いて頂くようになった」ということだった。

この話は、佐々木喜善が書いた『老媼夜譚 (ろうおうやたん)』」という本に出ている。 辷石谷江(はねいしたにえ)さんという方の 話を1冊の本にまとめたもので、喜善が谷 江さんからこの話を聞いたときには谷江さ んは70を超えたぐらいで、谷江さんは1850 年頃に生まれ、「みよお祖母ちゃん」から話 を聞いているので、1700年代の終わりの頃 からこの話は語られていたのだろうと推測 される。かつても遺骨が見つからず悲しい 思いをしていたのだろう。

民話の会では、福島、岩手、宮城とそれぞれ震災の体験を聴き、体験談としてまとめているそうだ。

今回は、宮城や岩手で民話と出会い、民話が語り継がれるなかで、時代時代の思いや知恵をのせて変化していったり、新しく生まれていく現場を目撃すると同時に、時代の変化によってその流れがかき消されようとしていたところに震災があってまた燃え上がり、受け渡されていること、また、現代の技術を駆使したアーカイブ、作品という形でも保存されていくことを垣間見た思いだった。それが文化であり、復興を支えるのだ。

続く